

No.1

December 20, 1988

Information

特別講演

1987年10月13日(火)・臨時総会(大阪・中之島センタービル 花の間)

講師・題目

宇野 収 : 関西地域の活性化について

— 関西文化学術研究都市と関西新空港 —

日本工学アカデミー

THE ENGINEERING ACADEMY OF JAPAN

関西地域の活性化について

——関西文化学術研究都市と関西新空港——



宇 野 収

大正6年(1917)5月29日、京都生まれ
昭和17年9月 東京帝国大学法学部政治学科卒業
昭和20年11月 大建産業(株)入社、昭和25年3月呉羽
紡績(株)、昭和41年4月東洋紡績(株)に
引続き勤務
昭和53年7月 東洋紡績(株)取締役社長
昭和58年7月 東洋紡績(株)取締役会長
昭和61年6月 関西文化学術研究都市推進機構会
長就任
昭和62年5月 (社)関西経済連合会会長就任
昭和57年4月 藍綬褒章受賞

1. パラダイム・シフトの時代

関西の将来構想ということでございますが、このごろ思っておるんですけれども、関西というよりも、世の中が大変今、ご存知のように大きな変わり目になっておりまして、特に皆さんご専門の技術の世界で言えば、今は第3次の産業革命の時代ということであろうかと思えます。ちょうど200年前に蒸気と鉄が一つの大きな技術の革命をもたらしたとシュムペーターが言っておりますが、100年前には、それが電気になり、あるいは自動車になり、これまた一つの時代の画期的な転換をした時期かと思えます。今はそれがいろんな意味で、エレクトロニクスを中心にして幾つかの電気の関係の問題、また新素材の問題、あるいはバイオの問題も出ており、私ども専門外の者には非常に理解ができないわけでありまして、何かが起こっているということだけは間違いのないわけでありまして、そういう意味で大きなパラダイム・シフトという時代になっておるのではないかと思います。そのような背景の中で、関西がどうなっているかというよりも、一体日本がどうなっているかという問題の方が非常に大きな問題ではないかと思います。その日本の中での関西がどうなるかということの

方に考えを持っていかないと、地域の問題だけを言ってるのはどうかなと思います。

その意味で、最初に私が申し上げたいのは、やはり今の私どもの日本の環境についてです。ご承知のとおり、ここ10年くらいの間に日本の1人当たりの所得が5,000ドルから1万ドルに上がったというように言われております。1万ドルというのは、世界の中では1人当たりの収入の多い国の仲間に入ったということでありまして。同時に日本のGNPがご承知のとおり世界の10%となっておりますが、円が非常に高くなっておりますから、計算の仕方によると15%となるのではないかと思います。そういう中で、日本の世界での役割が全然変わってしまっている、ということを意外に私ども自分では理解していない面があるように私は思います。

最近では国際化という言葉が随分はやっておりますが、今までの国際化というのは、自分たちには資源がなくて、何とか早く国を豊かにしなければという努力をする中で、世界の各国と仲良くして、喧嘩をしないで、もっと簡単に言うと、あちこちの技術をできるだけ持ってきて、自分たちがそれを開発し、産業の糧にして、そしてそれをいい製

品にして輸出して国を富ますというような、追いつき追い越せというようなことがある種の国際化という言葉の裏返しでなかったかと思います。今はそれが許されない時代になってきております。これは日常起こっております貿易摩擦問題にいたしましても、あるいは外貨が非常にたまるという、あるいは外貨が非常に減るという、その極端な国際的な収支のアンバランスの中で日本だけが突出しているという、そういう国になっての日本の国際化というのは一体何なのか、ということをもう少し考えて見ますと、非常に事態が変わっているように思います。

一言で言うならば、かつての国際化が、そういう意味の外から与えられた条件の中で、いかにして自分が効率よく動くかというところにポイントがあったとすれば、今の国際化は世界が日本だけが突出しているために、ぎくしゃくする経済の動きをどういうふうにスムーズに動かすかという心配りをして、我々が経済、政治、すべての面で動かなければならない、という意味での国際化に変わっているのではないかと私は解釈している次第です。

そういう中で最近感じますことは、どういうふうにして我々が国際的に寄与できるか、あるいは国際の経済運営がうまくいく方法が考えられるのかということですが、やはり先ほど申し上げた今が第3次の産業革命の時代であるという認識をいたしておりますが、これは技術の面だけではなくて、文化の流れ、文明の流れというもの、一つここで大きなターニング・ポイントに来ているのではないだろうか、と感じるわけでございます。

これは私が自分で考えたのではなくて、これから先は、私は受け売りを申し上げますから、後ほどまた時間がありますときに皆さんからいろいろとご批判をいただけたらと思います。我々は明治以来、ひたすら脱亜入欧ということで、欧米の先進国の物の考え方、文化文明、技術を取り入れるということで、ひたすら発展を続けてきました。そういう西洋流の物の考え方というのは、皆さんご承知のとおり、やはりデカルト、ニュートンに始まる一つの科学、分析、そうしたものの基礎の上に成り立っていると理解されているようです。

そういう意味で非常に細かい分析をし、合理的な解析をしということで、大変精緻な一つの物の考え方の体系ができ、その体系の上に技術が組み立てられたという、その時代がいろんな面で問題を起こしてると思います。これは簡単な話が、例えば医学の問題にいたしましても、非常に部分的な一つの病状とか病源とかいうものを探求して、部分的なそれに対する対症療法というのができても、生命体全体をそれで維持できるのかという問題はちょっと別であるということが幾つか起こっていることはご承知のとおりです。同じようなことが、例えば今までの学問の分類による物理と科学と医学と、あるいは社会学というものが、その分類のままで研究していった全体がつかめるのかという問題も起こっております。ここで日本のみならず、世界がやはりもう一遍新しい学問の体系、さらに言うならば、新しい文化の秩序というものをここで模索しているということであろうか、と思う次第です。

こういう中で、日本に期待されておるのは結局新しい物の考え方、新しい文化の秩序というものを日本がもしつくり得るならば、これは世界に寄与できるということであろうかと思います。先ほどから申し上げております今日本に求められている国際化というのは、当面の幾つかの貿易摩擦を解決するとか、何かという小手先の問題ではなくて、もう少し21世紀をにらんで、西洋文明、あるいは西洋の文化というものが一つのターニング・ポイントを来たしたその中に次の新しい物の考え方というのは一体どういうふうにしてつくったらいいいのかという、物の考え方の新しい秩序づくりを日本が担うことが、非常に基本的な、今我々に課せられている仕事ではないだろうか考える次第です。

2. 私の考え — 開国と基礎研究の促進

大変難しい話を自分で人の本を読みながら申し上げておるわけでありますから、受け売りのようなことを申し上げておりますが、それでは、具体的に私はどうしたらいいのかということになりますと、やはり一つは、強く海外から要望されているように、日本の国というものをもっと海外に開

かなきゃいかんということだと思います。これは独り貿易の面で摩擦が起こっているから、いろんな関税を低くしろ、あるいは非関税障壁を外せという、そういう問題だけではなく、もっと積極的に国内市場を開放して海外からの交易をもっと広めるといふ問題もありますし、日本の技術情報をもっと海外に出さないかんというふうな問題もありましょうし、また日本に興味あるなら海外の人がもっと入ってくるという問題も含めて、日本の開放というものについて、もっと考えなければいかんのではないかと思います。これはアメリカだけの問題ではなく、私はむしろアジアの国に対して、どういふことに我々が寄与できるかということが非常に大事な問題ではないだろうかと思ひます。たまたま来年の5月には、大阪で環太平洋経済会議（PECC）というのがございます。大来佐武郎さんが会長をしておられる会議です。この会議には太平洋圏の諸国、カナダの西海岸、アメリカの西海岸、そしてニュージーランド、オーストラリア、それからASEAN、台湾、韓国と、そういう国に加えて最近中国も入ってきたいと言い、ソ連も入ってきたいと言っております。これらの中で日本が一体どういふふうに、これらの国と経済的に、技術的にお互いの交流がうまくいくな方法を考えるかということが、実は具体的な国際交流の問題でありますし、それは先ほど申し上げている日本がもっと自分の国を開くという問題ではないだろうかと思ふのが一つでございます。

もう一つは、これは皆様ご専門の、つとにご承知のとおりですが、日本の基礎研究をもっと進めなければいかぬという問題だと思います。先般科学技術庁の会議がありまして、参りましたら、ソニーの井深さんが、海外の特にアメリカ、ヨーロッパの基礎研究が進んでいる。日本は基礎研究が弱いから、もっと基礎研究に予算も組め、もっとやれということが一般の理論であると申されました。しかしながら、井深さんのご自身のご意見は、それもそうだけど、それを開発する研究において日本が進んでいるというのは、これまた何も日本が悪いことをしてるわけじゃないんだと。だから日本は開発研究に進んで、欧米は基礎研究が進んでると。そこで分業したらいいじゃないかというご

意見もありました。私は技術のことはわかりませんので、あまり素人が口を挟むべき問題ではないかと思いますが、私もやっぱり、我々はもっと基礎研究をやらなきゃいかんのではないかと思います。基礎研究をやるといふベースがなくして、我々が開発研究だけやるというのは、ちょっといささか2階に上がっておる間に、下から梯子を外されたらどうするんですかという問題のようにも私は思ひます。これはまた後ほど皆様のご批判を頂戴したいわけですから。

そういうことで今から私どもに課せられている国際化というのは、私は以上の2点、一つは国内をいかにいろんな面で開放するかという問題、もう一つは本当に我々が基礎研究、あるいは創造的な基礎研究をもっと伸ばすという問題、を進めることだと思います。先ほど関西の将来構想とは申しましたが、実はむしろそれよりももう少し前のところで、世界の中における日本、そしてその日本に課せられている国際化というのは、こういうことだということでないかという私の理解を申し上げます。

3. 関西の性格

さて、そういう中で、日本の中の関西というのは何をしようとしてるのかという本題に近いところに触れてまいりたいと思ひます。大体申しますと関西の現在の経済規模というのは、ほぼ日本のGNPの2割くらいです。かつてはもっとあったよという話もありますが、要するに現在は2割くらいのところなんです。そして私なりに解釈いたしますならば、現在の関西は、ほぼ四つぐらいの性格を持った地域であると思ひます。

(1) 一つは、ご承知のとおり、歴史と伝統を非常に持った地域です。7世紀、8世紀に大阪に難波京があって、それが奈良の平城京に移り、それから先、18世紀まで京都に平安京がありました。このことは王朝があったというだけでなく、その中に幾つかの文化、伝統が非常に育まれた地域であるということは、もう紛れもないことです。東京が文化の中心であるとしたら、それは近々100年余りのところであろうかと思ひます。

そういう意味で、関西は文化、伝統の地域であ

るということになると思います。最近発表されました第4次国土計画、つまり4全総の中では関西というのは“文化首都圏”であるという考え方でまとめたという原稿がありました。それに対して、いろんないきさつがありまして、結局“文化経済圏”というふうに変わりました。しかし、私は基本的にはやはり関西は“文化首都圏”という性格をもともと持っている地域であるというのが第1点です。

(2) 次の点は、非常に多様な性格を持った地域であるということです。ご承知のとおり、関西の中心は京阪神、京都、大阪、神戸という三つの代表的な都市でありますし、この地域の持っている性格は、おのおの非常に違います。

ご承知のとおり、京都は先ほど申ししておりますような伝統と文化があります。したがって非常にある意味では保守的な町であります。同時に極めて片方では革新的なところでございます。昨日発表になりましたノーベル賞をもらわれた利根川博士も京都大学の出身です。日本でノーベル賞をもらわれた方は今まで7人です。7人のうちおひとりは佐藤元総理であります。技術とはちょっと違う平和賞です。もうおひとりは川端先生、これは文学のノーベル賞です。あとの5人の方が、いずれかの形で自然科学に関連のある方ですが、この方々が不思議に皆さん京都のご出身か京都大学のご出身かということになっております。残念ながらほかの大学ご出身としては、東大出の江崎さんがおられますが、これも京都のご出身というふうに言えば、すべて京都であるということになります。これをこじつけて考えれば、やはり世界に通用するか、あるいは世界に評価されるような独創性のある考え方が育まれるような風土を持ったところであるのが京都ではないかと私は思うわけです。

同じように神戸は早くから国際的な海洋都市として非常に開放的な、一言で言うと、我々から見るとハイカラな町ということです。

大阪が、これは非常につかみにくい地域ですが、大阪というのは最近ちょっとそういう精神が衰えておりますが、いわゆる企業家精神が非常に旺盛なところなんです。大阪弁で言いますと、「やってみ

なはれ」、「見とくなはれ」という言葉があります。とにかくあんたやってみたら、よっしゃ、それじゃやるから見ていてくださいというような、そういう一つのベンチャー精神と言いますか、企業家精神の横溢したところなんです。

それぞれ関西の核になる三つの都市がそれぞれの性格を非常に鮮明に持っていると思います。しかしながら一たび全体としてくくってきますと、やはり関西という一つの連帯感というものがあると。だから多様性があって連帯感がある地域というのが関西ではないかと思います。後ほどちょっとまた触れますが、では東京は一体どうなんかと。というと、どうも私は、これは東京の悪口を言うてゐるわけではありませんが、地域が広くて非常に集中して、大変なパワーがありますが、物の考え方にそれほど際立った違いがだんだんなくなってきた、ある意味で皆が同じ考え方に収斂していくような地域でないかなという感じがします。これはどちらがよしあしかは別として、関西というのは、そういう意味で一つの多様な考え方を持っている地域の一つの集団の地域であるというように考えられるのではないかと、というのが第2点です。

(3) 第3番目は、これは関西の非常に暗いウィーク・ポイントでもあります。やはり産業構造の中に成熟した、昔の言葉で言うと重厚長大ですが、要するに素材産業、そして造船その他鉄鋼、あるいは化学、繊維というふうな成熟度の高い産業が多い。そしてよく調べてみますと、全国比でこれらの産業の輸出比率が高いんですね。したがって成熟度が高くて輸出比率が高くてというような地域ですから、G5以降の円高になりますと非常に輸出競争力が衰えてくる、しかも成長性が少ないという、そういう意味での関西の持つておる停滞した部分が実は基本的な性格の中にあるということです。もちろんエレクトロニクス関係をはじめ幾つかの近代産業があることも事実ですが、全体の性格として見ると、そういう性格があると思います。

(4) そして最後は、これは今日の構想に関連してくるわけですが、ナショナル・プロジェクトないしはそれに近い幾つかのプロジェクトを最も抱えた地域であるということです。すなわち、まず第

一に上げられますのは、皆様よくごらんになっております関西国際空港です。これは日本でも最近有名になりましたが、むしろアメリカで関空と言えば相当皆さんよくご存じな状態になってくるぐらい今アメリカとの間で問題を起こしております。これは昭和 68 年の 3 月に 24 時間運航のできるオフショアの空港として今建設が始まっております。

もう一つは、もっと長期の計画に属するかと思いますが、京阪奈の、正確に言えば関西文化学術研究都市という構想です。これについては後ほど詳しく申し上げますが、やはり 30 年ぐらいかけてじっくりやろうじゃないかというものです。もちろんこの学研都市が一つの軸になって、また関西のあちこちにある学研のいろんなセンターと結び合ってネットワークをつくらうということもありますが、いずれにしてもこれが関西の一つの大きなプロジェクトの軸です。なお近くは国際花と緑の博覧会、明石海峡の大橋、あるいは大阪テクノポートとか、いろいろなものがありまして、これらの合計が金額で申しますと 15 兆円に相当するプロジェクトがあります。

以上のような四つ、つまり ①関西は一方で非常に歴史と伝統を持った地域であるということ。②一方で非常にそれぞれの都市に、主要都市の性格がはっきりしておる、多様な都市の集合体であるということ。③産業組織としては、成熟度の高い、輸出率の高い産業が基盤としてあるということ。④ 21 世紀をにらんでナショナル・プロジェクトが、ちょっと大げさに言いますと、目白押しに並んだ全国で一番プロジェクトの多い地域であるということに相成ろうかと思えます。

これから私が申し上げる関西の将来構想は、先ほどの幾つかのプロジェクトの中で最も 21 世紀に向かっていく構想と言える二つのプロジェクトを中心にしてお話ししたいと思います。

4. 関西学術研究都市構想

ちょうど先週総理が大阪に見えました際、ヘリコプターで学研都市の上を私ずっとご案内いたしました。それからあと続いて国際空港の方へもヘリコプターで行かれました。総理が驚いておられたのは、自分が在任中にゴーというサインを出し

て、どこら辺まで進んでるのかなあと思っていたが、空港は意外に工事が進んでおることと、それからこんなに大きいもんだったのかなあとという、実際見て感じたことを帰って来られてから印象を言うておられました。

学研都市については、つとに阪大総長の熊谷先生はご存じですので、いささか私はお話をしにくいわけですが、筑波の学術研究都市と違うところを一つ申し上げて、なぜ関西に今そういう学研都市をつくっておるのかということに触れていきたいと思えます。ご承知のとおり先ほど申し上げた大きな時代の変革期の中で、いかにして日本が世界の中で国際化できる運動につながるかということの一つに、先ほど申し上げた非常に基本的な独創技術を出せるようなところをつくらなくかんということが、この学研都市のもとです。したがって物の考え方は、自然科学だけでなく、社会科学、人文科学というふうな領域についても研究を深めていくこと。それから同時に国際化を非常に意識しなければならない。だからやはり海外の人に、もっともっと入ってもらう。同時に海外の人の持ってきた情報ももらうが、できた情報は海外に渡しますよというような意味の開かれた研究施設をつくりたい。それからあとは産官学が協同してこれに資本、人を出していくということも考えておるわけです。そういう点になると、筑波の方はやはり国立の研究所、あるいは国立の教育施設を東京から疎開させて 1 箇所に集めるということがスタート・ポイントであったというふうに理解しております。それから自然科学を軸にした研究をするというふうに承っております。そういう意味ではいろんな分野にわたっての、しかも産官学の協同した分野での研究をすることが関西の学研都市の基本的な物の考え方です。

先ほどちょっと触れましたように、関西の文化首都圏というものを想定いたしました場合には、学研都市はその核になる、あくまでそのヘソのようなものが学研都市であると思えます。民族学の梅棹先生は、総国分寺という言葉を使っておりますが、昔の言葉で言えば、関西の文化学術都市は総国分寺であって、そしてあちこちにできる学研都市構想というのは国分寺である。だからその

国分寺と総国分寺の間をずっとネットでつなぐことによって力を出すというような考え方にすればいいじゃないかと。筑波だから国分寺で、こちらの学研都市が総国分寺というんじゃないんですけれども、関西の中では、こういう考え方にしたらどうかと考えておるわけです。

私は昨年の6月に学研都市の建設を促進する中核機構というものができましたときに、その仕事を引き受けまして、感じたことは、これは大変だなあと思いました。一つは非常に構想は大きいわけですが、なかなか日本の場合は権限がないと進まないということと、これは後ほど触れますが、日本の場合は社会構造が全部縦社会で発展してきて、縦の枠が非常にありましてですね、初めから枠を外してやろうというような体制がないわけです。

具体的には東京の学研都市に関係する省庁をよくよく調べますと、16省庁あるんですね、16省庁ですよ。よろしいですか、もう大変なことです。16省庁の皆さんから了解をとって進めるということがどんなに難しいことか皆さんもつとにご理解いただけたと思います。中央がまず総理です。それから学研都市の地域が、筑波の場合ですと茨城県の中にあるので、茨城県の知事さんがお話を了解していただければ進むわけですが、関西の学研都市は幸か不幸か、その全体の地域が5割は京都、2割5分が大阪、2割5分が奈良という3府県の県境のまたがったところに地域を置いておるわけです。そこへもってきて学研都市の中には自治体が5市3町あるわけです。だから5市3町の町長さん、市長さん、それから3知事さん、そして18省庁というたら、これはもう初めからできないということです。そんなことで初めは気がつかなかったんですが、ちょっとやってみたら、「こらえらいこっちゃな」ということになったのが、推進機構をやりまして3箇月目の印象であって、「これはもうとてもしゃせん」ということになりました。

そこはやっぱり私ども民間から来た者は、「できなきゃできるようにしたらいいじゃないか」という話になったわけです。そうして皆さんのお知恵を借りまして、関西文化学術研究都市建設促進

連盟——まずこういうときには政界の先生に入ってもらわんといかんですね——を3箇月目につくっていただき、議員立法という形で今年の6月に関西文化学術研究都市建設特別法という法律ができたわけです。考えてみると、1年弱で法律ができるというのは、これは非常に速いスピードだったと私は思います。これは何も私がやったんじゃないくて、皆さんがそういうことにご共鳴いただいたからです。

しかしながら、そのときに最初から私ども考えておったことは、これは法律できただけでも進まないよ、だから法律ができた上に内閣の閣議でこうしよう、ああしようということを決めてもらわないと、各大臣またうんと言ってもらえないよという意味で、学研都市の関係閣僚会議というのをやっていただきたいと、二つ並べて一緒に要請しておったわけです。これも幸いにして、この10月に関係閣僚懇談会という形でできまして、2日にこの第1回の会議をやっていただけたというところまでまいりました。私どもが特に要望しておったのは、中曽根内閣はいずれにしても今月いっぱいではなくなる。だから中曽根内閣の間に一遍だけ会議やってくださいと。そうしますとどなたが次の総理になっても、法律は生きてるし、それから関係閣僚会議はやることに決まっているので、やりやすいということもあったわけです。幸い、これも10月2日に第1回をやっていただいたところ、皆さんえらい意気挙げて、そや、やるべきだ、やるべきだということであったそうです。

日本の縦社会の中で困った問題を一応クリアできる仕組みだけはできたということですが、いずれにしても先ほどから申し上げておりますように、研究都市というのは、そんなに一遍に、とんとんとあと何日というような形でやるべきことではありませんので、30年はかかると私は思っております。したがって21世紀の初めごろまでのところで一つの区切りがあって、21世紀に入ってから15年余りやって、それでそのころになったらようやく何か一つやってるなあというふうなものになるぐらいのものでしょう。基礎研究があと900日よとか、あとが600日よとかいう形でやったら、ろくなものがないということだけは素人の私もわ

かっておりますので、時間かけてやったらいいと思っておるわけです。

総括して申し上げますと、学研都市の性格は、私なりに解釈いたしますと、一つはカルチャー・シティー、もう一つはサイエンス・シティー、もう一つはエコロジカルなシティーということで、エコポリスとでも申しましょうか、そしてあとは再々申し上げてるように国際的なシティーというような性格を持ったものになれば成功であると思っておる次第です。

ほぼこれをやるのに5兆円ぐらいの金がかかるだろうと思います。一応面積を申し上げるならば、学研都市の総地域は1万5,000 haです。筑波が2,700 haですから4.5倍余りになるかと思えます。しかしこれは、もともとあった村落を入れた全体の地域でありまして、京阪神の場合は、それを12の幾つかのクラスターという研究地域にまた細かく割っておりますので、この12の研究地域の合計の面積はほぼ3,000 haです。したがって筑波の約2割ぐらい大きい研究地域があるということです。現在は、この地域に住んでいる人は約15万人ですが、これが完成いたしました暁の推定は38万人くらいになると思います。

以上が大体学研都市についての私どもの今の状態ですが、私どもが今一番注意しなければいけないことは、やはりなぜ学研都市をつくるのかという基本的な物の考え方をしょっちゅう頭に置いてやらんといけません。私は今年に入りましてフランスの学研都市のソフィアンティポリス、それからパリの近くにあるユードフランス、それからベルギーのルーバンナールームですか、その辺を見学してまいりまして、あと住友電工さんもおいでになってるアメリカのトライアングルリサーチパークへ行き、それからスタンフォード大学へ行きました。私は、技術、科学のことはわかりませんから、どうして運営してるかということ、それから地代は幾らですかということを見に行ったわけです。そこでわかったことは、何と日本の土地の値段は高いなあということです。ああいうところでありまして、一般の町の中の土地の値段とは違いますが、最低日本の価格は、最低で10倍以上です。

そういうことでありますから、今非常に私ども困っているのは土地の値段をいかにして上げないようにするか、それから土地の値段に大きな金を寝かしてしまわないようにするにはどうしたらいいのかということです。いろいろ考えておりますが、やはりあんまり知恵がないので、土地信託をやって、その土地を回しながら、その上で研究施設をつくるというふうなことではないかと思えます。

もう一つは、海外から来た研究スタッフ、あるいはプロフェッサーがどこへ寝泊りするのかという問題です。これもまた非常な問題でありまして、寝泊りするところはできるんですけど、お金が払えるだけの範囲におさめられるかという問題が非常にあるわけです。大ざっぱに言えば、やはりそこそこの施設にして、そして半分くらいは国がそれを補助するというふうな制度でもやらないと、とても海外の人は来れない。なるほど立派だと、来たい、ただお金は払えないということになったら、これはどうしようもないわけです。そういう土地の値段の問題、あるいは宿泊設備のあり方が今の問題でございます。

もう一つ一番大きな問題は、なぜ学研都市をつくるのかという基本的な物の考え方をしょっちゅう復習をしておりますとですね、だんだん道ができたり、研究所が並んだりするけど、結局、これ何のためにつくったのかというようなことになるおそれがあるんで、それを私は強調してるんです。「真実一路」という小説がございましたね。その冒頭の白秋の詩「巡礼」の「真実一路の旅なれど、真実、鈴ふり思い出す」という、あの、やっぱり真実は何だったかといって鈴ふりながら、30年間やらんといかんなということを言っておるような次第です。

5. 関西国際空港

もう一つのプロジェクトは関西空港です。ご承知のとおり、日本の空港では24時間運航できる空港は別にありません。成田でも、あれだけの施設ができましたが、決して完全な運航ができてるわけでもありませんし、特に東京へ入るアクセス、貨物の集荷センターの設備のあり方、それから駐

車場のあり方は、もうすべてこれは落第です。ですから、そういうことのない形の24時間運航のできる空港をつくらないかんということで、既に現在第1期工事が進行中です。

これについての問題は、アメリカから言われているところの関西空港の工事にアメリカがなぜ入れないのかという、アメリカとの摩擦問題を当面どうクリアするかということです。ほぼ今の状態では68年の3月には予定のとおり第1期工事は完成して開港できると思います。しかしながら第1期工事というのは滑走路が1本だけでして、これまた完全な状態ではありません。もともと関西空港というのは滑走路が3本の計画でありますから、あとの2本を続いてやっていかないと、1本だけではまた中途半端になってしまいます。この方の予算をどうつけてもらうかというんで、また二、三日のうちに東京へ陳情に行くのが私の仕事の一つです。

6. 情報の出入口と発信源

この学研都市と関西空港というのが実は幾つかある関西のプロジェクトの中の何と申ししましても軸であります。なぜ軸であるかと言いますと、先ほど申し上げております国際化と絡んでくるわけですが、関西空港はやはり日本の一つの玄関になるわけで、そこから貨物が出入りいたしますが、人も出入りするわけです。人が出入りするということは、情報が出入りするわけです。ですから、これは日本の国際的な情報の出入口になるという性格のものだと私は思います。

それから学研都市が理想のとおりな建設が進んで、理想のとおり成果を上げるならば、これは世界に対して一つの大きな情報の発信源になると思います。したがって関西に幾つかのプロジェクトがありますが、一方で情報の発信源があつて、一方で情報の出入口ができてということになれば、おのずからこの地域の活性化することは間違いない。この地域が活性化すれば、それは日本の活性化につながるし、国際化ということにふさわしい一つの役割を担えるんじゃないかと、いささかドンキホーテ的な希望も持ちながら今やっておるのが現状でございます。

先ほど申し上げましたが、それ以外に幾つかのプロジェクトがあります。神戸のポートアイランドのプロジェクト、大阪にはテクノポートのプロジェクトもありますし、なお研究都市については各地に随分ありまして、特にきょうは西播磨の研究都市のことでいろいろとお話を承ったりしております、こういう地域とのネットをどんどん結ぶことによって、この地域の活性化ができるんだと理解いたしております。

7. 縦社会を横に継ぐ

関西の基本構想というのを、おおよそご理解いただけたかと思います。さりながら、それは将来構想を言っておるわけでありまして、現状は先ほど申し上げたように関西には幾つかの暗い部分があるんで、成熟産業をどう構造転換していくか、産業構造をどう調整していくかという問題は、なかなか深刻です。特に深刻さがどこにくるかという、みんな雇用の問題に集中してくるわけですから、そういう産業から雇用を失う人たちをどういうふうにして救済できるのか、できない場合はどうするのかという問題を日常抱えながら、先の明るいプロジェクトにどうつなぐかということになりますと、そうやさしいことではありません。したがって細かい産業調整の問題の詰めはやりませんが、とにかく幾つかの新しいプロジェクトを手前に持ち込んで、その工事を進めながら考えていこうじゃないかと考えております。

その過程で学研都市で感じておりますのと同じような幾つかの問題点があります。それはやはり一言で申しますと、何かというと日本の行政組織、あるいは日本の教育制度もそうだと思いますが、ひたすら縦社会の中で、縦の制度というものが非常に機能を発揮した約100年ぐらいたったと思います。このおかげでこれだけの成長をしたわけですが、100年間生きてきたこの縦の制度が、実は今まで申し上げました幾つかの21世紀をにらんだ次の展開の場合には、ほとんど機能しないというよりも、非常に邪魔になる制度が残っておるのが現状です。しかし邪魔になってるからやめてくださいとも言えないのも、これまた現状です。そういうことで縦社会をいかに横につなぐか、縦

社会の壁をいかに低くするかということについて、私が行政組織だけについて申しますと、三つばかりのを感じるわけです。

まず、特に行政組織の中で各省別の縦割というもの、さらに各局別の枠というような問題です。通産省に入ったお役人はいつまでも通産省なんです。通産省から何々庁というような所に行かれることはありますが、大蔵省へ行くことはありません。大蔵省のお役人も、例えば経済企画庁に行かれることがあるかもしれませんが、大体大蔵省は大蔵省ということであります。そういう一旦決まった役所にはずっとおるんだという制度を何とか循環できるような制度に切り替わらんもんかということに非常に感じるわけです。つまりそういう人事の採用制度と、そして循環できるような制度を一遍、これはぜひ考えていただきたいというようなことを一つ感じます。

二つめは、何でもかんでも東京に集中しておるが、果たしてこれでいいのかとなると、これは非常に問題があるわけです。それじゃ何でもかんでも皆分けるということにもこれはいかない。したがって関西の立場から申しますと、先ほどから申し上げておりますので、お察しのとおり、もし関西に役所としてもってくるにふさわしいのは私は文部省、文化庁、科学技術庁というふうなところではないかと思っておりますので、時々大臣に言うておりますけれど、よく叱られますので、引っこめてはまた言うという冗談ぐらいのところで、進んでおりませんが、これはしかし本当に真剣に考えないといけないと思うんです。こういうことを申し上げて、「そら君できないよ」と言われる理由を聞いてみると、やっぱり「そんなところにおったら大蔵省から予算もらうわけにはいかんよ」とか、「第一役人が地方に住むの嫌がるよ」とか、そういう問題のように私は思うわけです。「そんなこと言っとっていいんですか」と私は思います。やはり分都とか遷都とかという問題の手前のところで、その地域に適当した役所を分けていくというようなことが一つの方法ではないかと思えます。

もう一つやはり広域行政ですね。これも非常に問題があります。日本が廃藩置県をやって、そして新しく県ができたわけで、その県が今 47 都道府

県あるわけですが、一体これだけ大きな時代の変革期の中で 47 の都道府県が要るんでしょうかと言うたら、積極的に要するという理由よりも、もういいじゃないかというのが多いんでしょうが、それがなかなかできない。例えば府県はそのまま置いて地方庁をやったらどうですかとか、何かというような話も我々も検討いたしておりますが、すべてこういう話はなかなか難しい。誰が猫の首に鈴をつけるかのたぐいのこともありまして、なかなか難しいんですが、しかしどう考えてもこの問題をクリアしないと、幾つかの構想は実現しないと私は思います。だからどういう機会にできるかと言うと、今までなら戦争があつてできた。しかし戦争がない状態でどうしてやるのか深刻に考えざるを得ないのです。

このごろ時々私は日本を連邦国家にしたらどうですかと申しておるわけです。このぐらい言つてると、無邪気であんまり怒られんで済みますが、よく考えて見ると、そのぐらいのことを言うて、手前のことを少し実現してもらわないといけません。最近では西ドイツの連邦制度というのを多少調べておりますが、調べていけばいくほど、これは非常に歴史的には長い経過があつてできておるんで、一遍に日本ではできないと思います。しかし、あの国鉄が JR 何々といつて幾つかになったんですから、日本も六つぐらいの連邦国家にして、東京に中央政府を置いて、外交と防衛は中央政府で、あとは各地方が自分で財源を握らないかん。財源を握らない役所というのは、あつても何の役にも立ちませんわけですから、それぞれが自分で財源を持って、自分の金でやれるようになればいいなあと、これは夢ですが、そのぐらいのことを時々言つて、あんまり腹も立たん話として言いながら、ぼつぼつ進めないと、なかなかこの問題は前に進まないというような感じがいたしております。

8. 岸边に立って流れを見る

大変雑駁な話を申し上げましたが、私は冒頭に申しましたように非常に世の中が、世界が大きな変わり目になっておりますので、案外その中に巻き込まれておると、物がわからなくなるんじゃないかと思うんです。ですから、大きな河の流れの

中に巻き込まれないで、一遍岸边に立って流れを見て、どの流れが本当に先につながる流れかというようなことを岸边に立って眺めるというふうな感じもこの際しながら、やはり 21 世紀の構想を立てねばならないんじゃないかと思うわけです。所詮、今まで申し上げたことをずっと考えてみると、日本が生きる道は幾つかの加工をやって、そして開発した技術を使って、そして商品を輸出して、そして食っていくといういわゆる加工貿易型の発展形態はとれない。とれないけれども、やはりこれだけ資源のない国で、これだけの人間が生きるためにはどうすればいいかと言えば、やっぱり我々の頭脳を絞って、そこで頭脳でつくって加工したものを輸出する。それによって日本が成り立つというように変わった加工貿易じゃないかと。結局我々が非常に独創的な研究を本当に物にしなければ、これはやっぱりできないんじゃないかということに最後は帰着するんじゃないか、と思います。

私は技術のことはわかりませんが、この実業の世界において、どうもいよいよ壁にぶつかってみて、この問題はどうしても達成しなければならない問題であろうと思いますし、関西の幾つかのプロジェクトが何らかの形でそういうものにつながってくるという期待と希望をかけてやっておるわけです。

世の中は、やはり自分の住んでる郷土への愛があって、関西の方が言えばどうしてもエゴになると思います。しかし私はこういうエゴは大いに持つべきであってですね、自分だけいいことをするというエゴじゃないわけですから、これは自分がよくなれば、これは必ず日本がよくなる、必ず世界がよくなると信じてやれるようなエゴであれば、大いにエゴを発揮すべきじゃないかと私は日常思っておる次第です。

質疑応答

司 会 いろいろ含蓄のあるお話をどうもありがとうございました。ご質問でもございますればと思いますが。どうぞ。

質 問 筑波大学に 10 年ぐらいいましたので、筑波のこと少しは知っております。宇野さんのおつ

しゃるとおり各省間の連絡が全然ございません。例えばですよ、筑波大学でセミナーやるとすると、科学技術庁だとか、いろいろなところに連絡いたします。許可が要るんです。私の研究室でやるセミナーで外国人の有名な人が来るときにも関係ないじゃないかと思うのですが、事前に許可が要る。歩いて来ればたった 5 分か 10 分で来られるところを本省まで行って許可をもらってから、こっちへ来てもらう、そういうふうに面倒くさいことがあります。だから今度はですね、民間ベースで是非おやりになってほしいということが一つ。

もう一つは、科学技術庁だとかいろんなことをやめたときに年寄りの住むとこがないんです。これも大変大きな問題で、次の職がないわけです。東京に通える人は通えますが、今なかなか職がありません。企業でも大学でも皆定年があり、仕方がないことかもしれませんが、とにかくやめた人がすることがない。関西の学研都市ができあがるときには、例えば工学というのは全部蓄積の学問——殊に工学、機械だとか電気だとか化学だとか全部、蓄積の学問——でございますので、年寄りが十分活動のできる場をつくってほしいということです。

宇 野 どうもありがとうございました。筑波は私も二、三度拝見いたしました。筑波に交流センターというのがございますね。あの交流センターでは非公式に各省の研究者の方がミーティングしておられ、大変効果があるというふうに承っております。関西学研都市の場合は、法律の面で非常に特典を持った研究交流施設という株式会社をセンターにつくることにしております。ここで民間の研究所も、あるいは幾つかのほかの研究所も皆寄合って、そこでいろんな交流をしてもらうというようにしたいと考えます。そこをまた中心にして研究地域全体の LAN とか VAN とか、あるいはまたあちこちのほかの研究センターとも交流ができるようなものにしたい、といま考えております。またいろいろお教えいただきたいと思っています。

それから筑波で、これは研究の行き詰まりもあるのですが、何か随分自殺をされる方があったということも聞きました。京阪奈の場合は、距

離から見ても大阪、京都へは 30 キロ足らず、奈良へは 10 キロくらいです。ですから、縄のれんとかなんかは学研都市につくらなくてもちょっとアクセスさえあれば、すぐ行けるよということで何とかカバーできるのではないかと考えております。

司 会 それではこれをもちまして特別講演を終わりたいと思います。工学アカデミーにも同じような問題があります。先ほどの関係官庁も工学アカデミーには多分 16 以上あるのではないかと思います。

ます。また先ほどの、なぜ学研都市をつくるかという基本的な物の考え方を復習するという話題は大変感銘いたしました。工学アカデミーもすぐにはなかなかうまくいきませんので、皆さんとともになぜ工学アカデミーがあるべきかという問題を 10 年、20 年、30 年と持続復習していただくことをお願いいたします。今日のご講演どうもありがとうございました。

案内図



1988年12月20日

編集 日本工学アカデミー
発行

〒108 東京都港区芝5-33-7 TEL. 03-798-6196
徳栄ビル日本電気(株)内 FAX. 03-798-6197